

週刊センターニュース No.265



第265号（2009年6月29日）毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

●●● 第236回共同学習会のご案内 ●●●

日時：7月7日（火）16時30分～18時

会場：角間キャンパス総合教育2号館5階D14教室

※双方向遠隔授業システムで、富山大学・福井大学を結んで行います。

報告者：渡辺達雄（大学教育開発・支援センター）および授業担当者

テーマ：「3大学共同開講共通教育科目「北陸学総論」の2009年度授業内容について」

趣旨：富山大学、福井大学、金沢大学の教員が共同担当し、双方向遠隔授業システムを用いて行われている共通教育科目「北陸学総論」について、今年度の授業日程・概要の確認とともに、昨年度を振り返り授業実施の過程で出てきた課題、授業内容の関連性の検討、また受講生の学習にとって有効と考えられる方法等、授業担当者も含め広く関係者の間で意見交換ができればと考えている。

●●● FDの再定義、再構築—日本高等教育学会第12回大会参加報告— ●●●

大学におけるFDの必要性が90年代初期の答申などで言及されて後、FD実施の努力義務化さらに実施義務化と進んで、FDにまつわる議論もバラエティに富みつつ変化してきた。その中で、規範的に押し付けるだけの議論・FD活動を反省し、そこから脱して、FDのメタ評価を通じた実効性のあるFD活動に向かうべきであるとの議論がますます高まっている。5月23日（土）、24日（日）に長崎大学で開催された標記大会のシンポジウムもそうした論調で展開された一つとみることができる。

四名のシンポジストのうち、興味深く思われた羽田貴史氏（東北大学高等教育開発推進センター）と佐藤浩章氏（愛媛大学教育学生機構教育企画室）の各報告について簡単に触れてみたい。羽田氏（関連する記事として、本センターニュース257、263号を参照。）は、FD活動として何が行われているのか全国的にあるいは全学的に調査し把握できているとしても、FD活動が本当に成果を上げているのかということまで至っておらず、活動の成果を測定するための方法が必要であると主張している。さらに、教育条件やカリキュラム、クラスサイズなどの様々な要素と教育効果との関係といった大学教育レベルでの教育メカニズムが解明されなければならず、教授・学習過程、知識構造と認識構造を明らかにするなど教育活動の実証研究（ここでは初・中等教育における教育方法学・教授学、教科教育学などの研究蓄積は積極的に活用できる）を踏まえた上で、何が教育効果を高めるのかを理解する必要があると考えを述べている。教育効果を生み出す教育能力を適切に定義せず（できず）に、授業の質を高める（授業改善）項目を列挙してそれがあたかも教育能力を逆規定するという状況は、大学内外で実施されている授業評価など種々のアンケートのあり方やアンケート結果に基づいたFD活動の改善のあり方そのものに対して再考を促している。こうした論点に加え、いま一つ不明確で一貫していない大学教員のコア能力の定義、それらの能力開発におけるキャリア・ステージの設定により、研究・教育・管理運営や倫理も含めた専門職としての発達を目指すFD活動の構築が急務であると主張している。以上のような課題を一度に解決することはできないが、例えば授業・カリキュラム開発に対して大学が様々な支援措置を施し、個別分野の教員が共同で研究・活動を組織的に進めていくこと、大学教員の養成プログラムが教授学等を含む形で大学院教育のガイドラインを作成すること、各部局（センター含む）教員がその枠を超えて大学教育を考える機会を持てるようなシステム（例えば、学内異動）を作ることなどを有効な方法として挙げている。

一方の佐藤氏は、愛媛大学において中心となって FD 活動を推し進めてきた経験と、国立教育政策研究所ファカルティ・ディベロッパー（FD を専従で担当する教職員を指す）研究会で開発した『大学・短大において FD に携わる人のための FD マップと利用ガイドライン』（平成 21 年 3 月）の紹介を踏まえ、「三層 FD 論」を提案している。その三層とは（1）授業の改善（ミクロ・レベル）（2）カリキュラムの改善（ミドル・レベル）（3）組織の整備・改革（マクロ・レベル）で（下図参照）、それぞれの主な対象は（1）教員個人（新任・中堅・ベテラン・非常勤）（2）カリキュラム委員（3）学長・理事・アドミニストレータとしている。詳しい説明は紙面の制約から省略するが、明確な指針がないままに試行錯誤しながら運営している実情が少なくない中で、実施している FD プログラムを「三層」（列側）と能力開発の段階としての「フェイズ」（行側）でクロスさせた下記のマップに位置づけて現状を把握し、かつ今後の方向性を検討するさいの指針として活用でき、またそれぞれの大学の状況に合わせて、各レベルでのフェイズに応じた目標・評価の指標設定および達成状況の確認ができるもので、現在の FD 活動を可視化するには、有効な手段になり得ると考えられる。

レベル フェイズ	ミクロ（授業・授業法）			ミドル（カリキュラム）			マクロ（組織）		
	目標	方法	評価	目標	方法	評価	目標	方法	評価
1.導入（気付く、分かる）									
2.基本（実践できる）									
3.応用（開発、報告できる）									
4.支援（教えられる）									

出典『大学・短大において FD に携わる人のための FD マップと利用ガイドライン』3 頁

（文責：評価システム研究部門 渡辺達雄）

○●○ 隠れたカリキュラムとしてのランチョンセミナーそして DVD 教育セミナー ○●○

大学教育開発・支援センターでは、6 月 2 日、角間キャンパス総合教育講義棟 A1 教室にて、「第 1 回 DVD 教育セミナー」を開催しました。テーマは、「人権を考える－裁判員制度広報用映画「評議」－」であり、その趣旨は、＜裁判員制度が始まりました。この制度により、市民が法を知り、人権意識をより一層高めることが期待されています。金沢地方裁判所より寄贈を受けた DVD により、セミナーを開催します。多くの学生諸君、および教職員の参加を期待します。＞というものでした。

授業における視聴覚教材の活用は多くの授業で行われています。このセミナーでは、企画者の私が、共通教育科目「日本国憲法概説」担当者の立場を離れて、敢えて何も説明を加えることなく、学生と一緒に DVD を視聴するだけにとどめました。ちなみに、この DVD は、昨年、金沢地裁に裁判員制度についてのミニレクチャーを行いたいのので資料をというお願いをしたさいに、広報用として寄贈を受けたものです。現在、最高裁判所の HP (<http://www.saibanin.courts.go.jp/news/video2.html>) において、他の 2 本の同種 DVD 同様、視聴が可能となっています。

ご存じのように、当センターでは、前期は毎日、後期は随時、ランチョンセミナーを開催し、正規授業外のカリキュラムとして、学生や教職員の方々に、随時、必要な情報を提供してきました。また、留学生の劇などは正課の学習成果の発表の場でもあり、さらに、公認サークルのミニコンサートなど、学生の課外活動成果の発表の場となってきました。平成 15 年 6 月 10 日に始まったこのセミナーは、通算で 503 回（平成 21 年 6 月末時点）という成果を挙げてきました。

今回新たに、DVD セミナーを、随時開催することに致しました。ランチョンの 30 分あまりでは、六十数分の DVD 上映は無理であったことが直接のきっかけではありましたが、今後とも、昼休みのランチョンの枠にとらわれることなく、本学における教育、学生支援のために必要な「隠れたカリキュラム」として、活用していくつもりです。各教職員におかれましては、この趣旨に相応しいビデオ等がありましたら、お知らせいただき、企画に知恵を貸していただければ幸いです。

（文責：教育支援システム研究部門 青野 透）